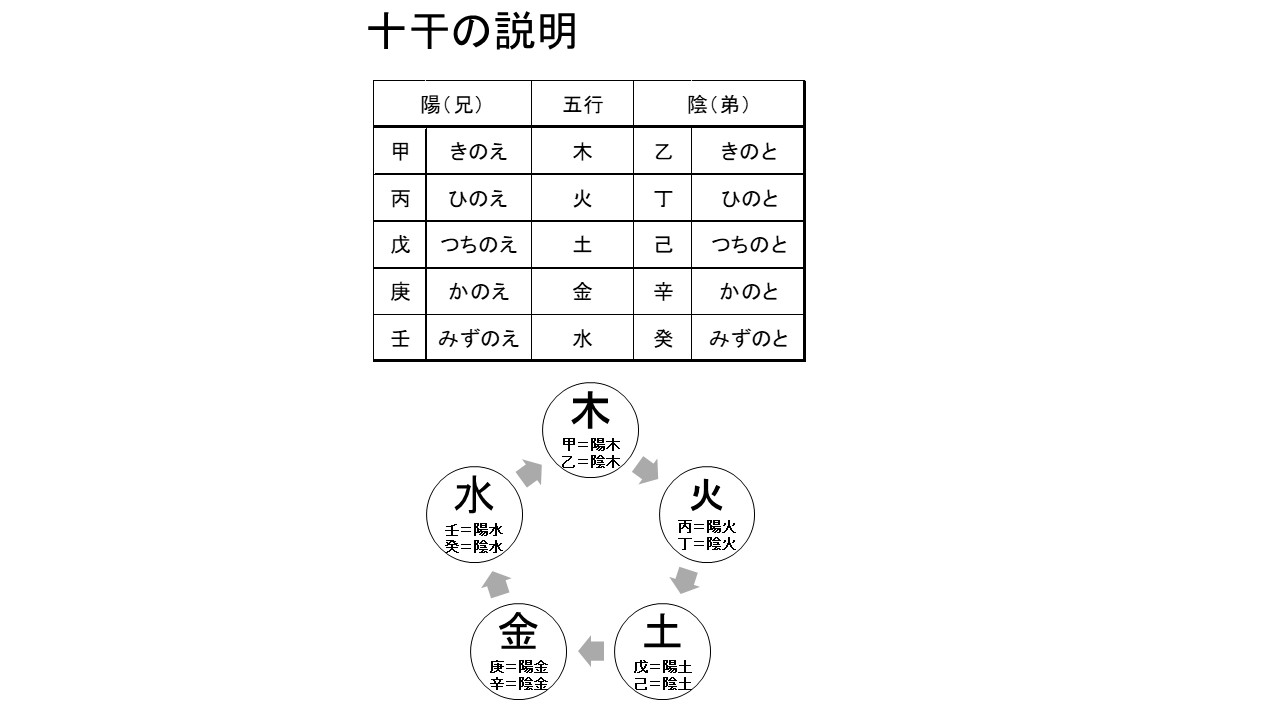
## 1-4 五行が刻む時間──十干・十二支・九星の正体

これまで、太極から始まり、陰陽、五行へと展開される風水の基本理論を見てきました。そしてそれらの理論は、単なる空間の構造にとどまらず、“時間”という側面にも深く関わっていることを忘れてはなりません。古代中国における暦の体系や氣の読み解き方において、「十干・十二支・九星」は、時間に宿る五行の表現として位置づけられているのです。

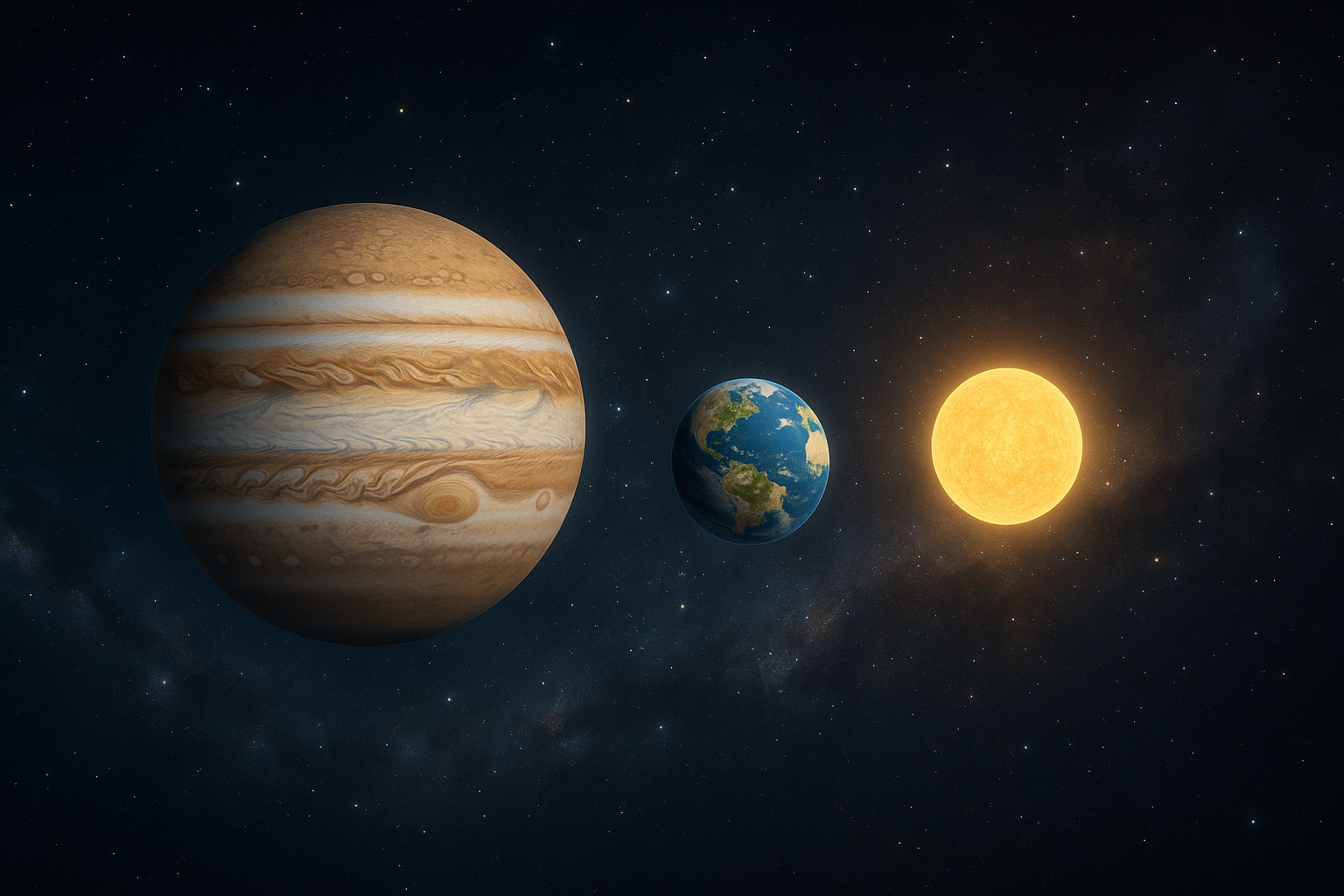
まず、「十干（じっかん）」とは、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸という10の要素のことを指します。



これらは陰陽と五行を組み合わせたものであり、たとえば甲（きのえ）は陽の木、乙（きのと）は陰の木、丙（ひのえ）は陽の火……というように、五行のそれぞれが陰陽に分かれて10の干を構成しているのです。

この十干は「時間の主軸」として機能しており、年・月・日・時間といったあらゆる時の氣を構成する骨格となっています。つまり、五行思想は空間だけでなく、“時間の構造”としても体系的に活用されてきたのです。

次に、「十二支（じゅうにし）」について考えてみましょう。



「子（ね）・丑（うし）・寅（とら）」といった十二の動物名で広く知られる十二支ですが、もともとは動物とは無関係の概念でした。その起源は、「天文観測」、つまり木星の公転周期に由来しているのです。

木星は約12年かけて太陽の周囲を一周します。この動きを基に、古代中国の天文官たちは天空を12の方角に分け、木星がどの位置にあるかによって“年”の性質や氣の流れを読み取ろうとしました。

これが十二支の原型であり、のちに農業や季節のサイクルとも結びついていったのです。

季節においても、たとえば、子（北）は冬至を示し、陰の氣が極まって陽の氣が生まれる起点とされます。

午（南）は夏至であり、陽の氣が極まり、そこから陰が生まれる転換点です。卯（東）は春分、酉（西）は秋分を表し、これらはすべて太陽の軌道や季節の変化に基づいて配置されています。

つまり、十二支は自然界の氣の流れを、時間軸に刻み込んだ象徴体系なのです。

このように、十二支は単なる記号や動物の並びではなく、“地球上の季節と天空の運行を対応させた表”なのです。

十干と十二支を組み合わせた「干支（かんし）」が60年で一巡するのは、十干（10）と十二支（12）の最小公倍数が60であることに由来しています。

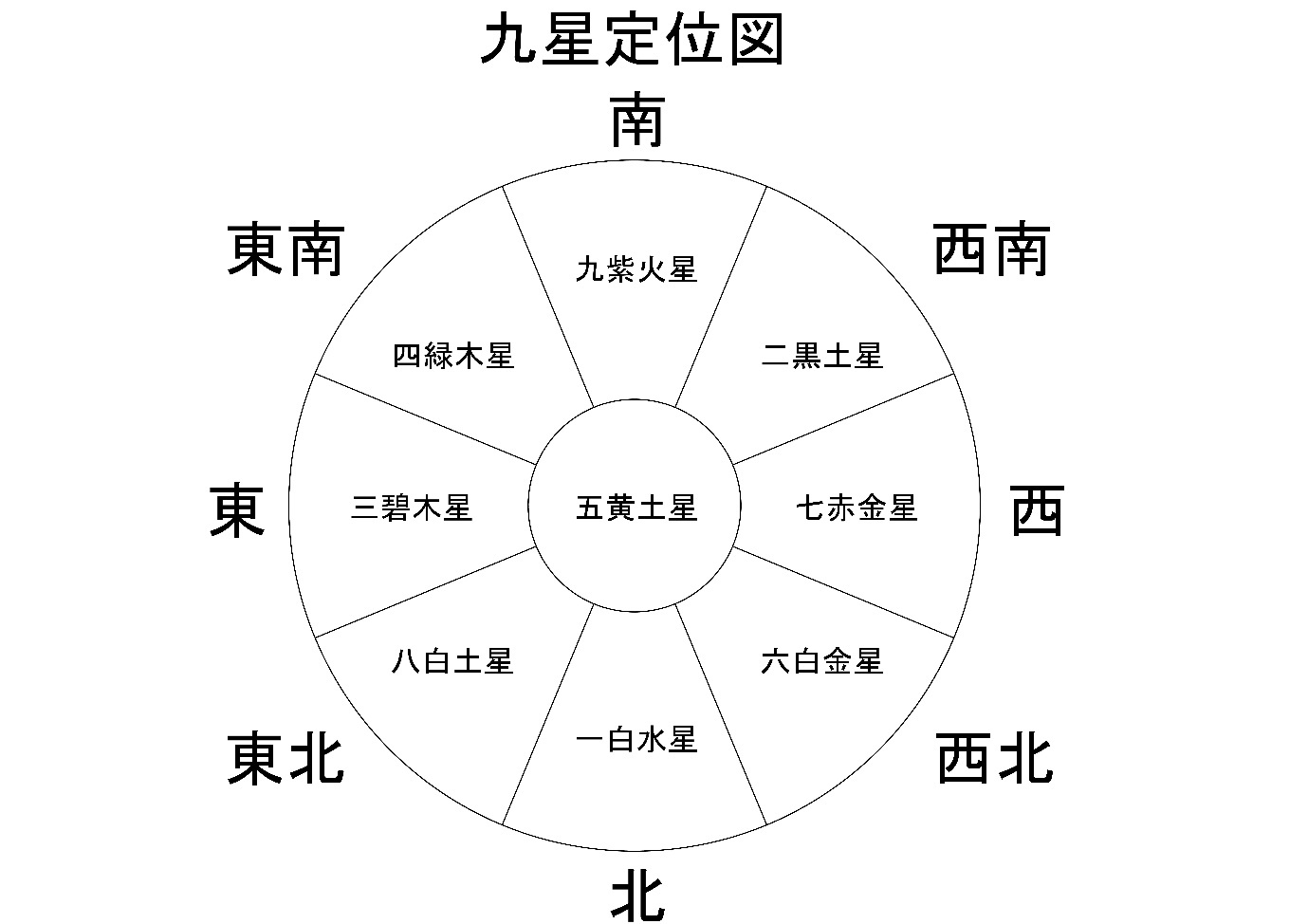
この“60年周期”という概念は、氣の流れが一巡して新たに循環し直すという宇宙観を象徴しているのです。

人が60歳になると還暦と迎えるといいますが、人生を一巡して、あらたな一巡を過ごしていく変わり目だということです。

次に、「九星（きゅうせい）」は、風水において時間と空間の両方を統合する決定的な要素とされています。

九星とは、一白水星・二黒土星・三碧木星・四緑木星・五黄土星・六白金星・七赤金星・八白土星・九紫火星の9つの星を指します。

これらは、古代中国の「洛書（らくしょ）」に基づく九宮の配置を原型としており、中央に五黄を据え、その周囲に東西南北と北東・北西・南東・南西の八方位に他の星を配置する形で、全体が九つの区画に分けられています。



九星は、天体そのものを表すのではなく、“五行に基づいた氣の性質”を9つに分類し、それを年・月・日・時間、さらには空間にも対応させたものです。

一白水星は北に位置し、寒さや水の氣を象徴します。九紫火星は南に位置し、情熱や光の氣を表します。こうした配置は決して偶然ではなく、地球の季節や氣候の流れと見事に一致しているのです。

たとえば、北＝冬＝水の氣＝一白水星、南＝夏＝火の氣＝九紫火星、東＝春＝木の氣＝三碧木星および四緑木星、西＝秋＝金の氣＝六白金星および七赤金星。

このような関係性は、地球の自転軸と太陽との関係、さらに空間内の氣の流れと一致しています。風水における“年盤”や“月盤”は、こうした九星の氣の循環をもとに設計されているのです。

つまり、九星は時間の流れを五行の氣として表現し、それを空間の構造と結びつける“羅針盤”のような役割を果たしているのです。

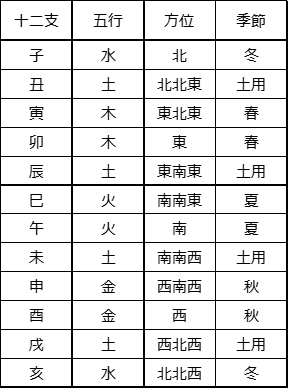
現代では「九星気学」などの名前で広く知られていますが、もともとは緻密な天文理論と氣の哲学を融合させた体系であり、単なる占いの一種ではありません。

ここまで見てきたように、五行とは単なる属性の分類ではなく、「空間」だけでなく「時間」にも貫かれた自然法則であることが明らかになります。つまり、風水は自然界の秩序を読み解き、活用する“自然科学”を根本として成り立ったものなのです。

太極に始まった氣の理論は、陰陽に分かれ、五行に展開し、空間に流れ、時間に宿り、最終的には私たちの日常生活を包み込んでいます。このリズムを読み解く技術こそが風水であり、それは自然と調和して生きるための叡智なのです。

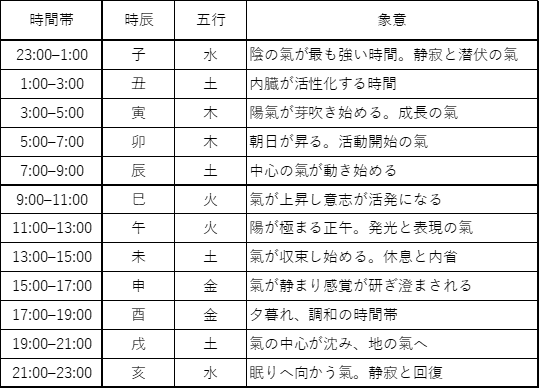
**【補足】十二支と季節・方位の関係**

以下の表は、十二支と五行、方位、節気、季節の関係を示したものである：

****

**【補足】時辰と五行・十二支・九星の対応**

古来より一日は十二の時辰に分けられ、それぞれに五行・十二支・九星が割り当てられていた。以下の表にその関係を示す：



このように、十干・十二支・九星はいずれも、天体の動き、季節、時間の変化と密接に結びついた自然法則の表現です。風水はこれらの知を空間に応用することで、人と宇宙のリズムを一致させようとする“時空の科学”でもあります。

◉ コラム：なぜ九星に“家族の象意”があるのか？──風水と宇宙観の関係

風水で使用される「九星」には、五行や方位だけでなく、父・母・長男・長女・三女といった“家族の象意”が割り当てられています。

これは一見すると占い的な要素に見えるかもしれませんが、実際にはそうではありません。

こうした象意は、古代中国の宇宙観や自然哲学に基づいた深い背景があります。

九星はそれぞれ、八卦の方位と結びついています。たとえば「六白金星」は西北の位置にあり、八卦では「乾（けん）」の卦に対応します。

「乾」は『易経』の冒頭に登場し、「乾為天（けんいてん）」とされるように、“天”の象徴であり、三本の陽爻で構成された純陽の卦です。

これには創造力や威厳、リーダーシップといった意味が込められており、そこから「父親」の象意が導かれているのです。

同じように、「二黒土星」は南西の方位にあり、「坤（こん）」の卦に対応します。

「坤」は“地”の象徴であり、柔軟で受容的な氣を持つため、「母親」の象意が与えられています。また、「三碧木星」は東に位置し、「震（しん）」の卦に結びついています。「震」は雷を象徴し、成長や飛び出す力を示すことから、「長男」とされる、という具合です。

このように、九星に割り当てられた家族の象意は、方位や季節、五行、八卦など、自然の原理に基づいて構成された象徴体系です。

人間の家族関係を自然界の氣の流れになぞらえることで、空間における氣の偏りを読み解きやすくするというのがその本質なのです。

ただし、本書は風水理論の専門解説書ではありません。そのため、八卦の配列や爻辞、象数といった詳細な解釈には立ち入りません。

あくまで、「風水の背後にはこのような自然哲学がある」という事実をご紹介するにとどめます。

より詳しく知りたい方は、『易経』や風水に関する専門書をご参照ください。

本章では、五行が時間に深く関わっていること、また十干・十二支・九星が自然法則を刻む言葉であることを確認してきました。

ここで明確にしておきたいのは、本書が風水理論の専門解説書ではないという点です。

実際の風水には、玄空飛星、玄空大卦、三合派、八宅、巒頭、理気など、複雑で多様な評価方法が存在しており、それぞれに膨大な知識と技術が求められます。

しかし、本書の目的は、それらの技術を網羅的に解説することではありません。

むしろ、風水という思想の背後にある“氣”の本質に注目し、その氣が空間や時間の中でどのように存在し、私たちにどのような影響を与えているのかを考察することで、風水の“現代的な意義”を再発見することにあります。

次章では、風水の核となる「氣」そのものに焦点を当て、科学、思想、宗教といった多角的な視点からその本質に迫っていきます。